

# 中世真言教学における識大の解釈

林山まゆり

## 一 はじめに

六大（地水火風空識）のうち、識大は心法とも称され、一般的には、無色無形であると理解される。しかし、真言教学では『即身成仏義』により六大が体大であることが強調されるようになったため、識大にも色形があると考えられるようになる。さらに、真言宗で重視される経典『大日経』やその註釈書の『大日経疏』では無相の菩提心を説く一方で、心を仏塔や月輪であると述べる箇所もあるなど、心の解釈が一樣ではないことから、空海以降の学匠の間では、識大に色形を認めるのかどうかということ論じることとなった。

この、識大に色形を認めるかどうかという問題について、真言宗では古義・新義共に「心法色形」という算題を立てて論じ、古義・新義は共に心法に色形はありと結論づけるものが多い。ただし、同じ結論であるとはいえず、その解釈方法はそれぞれの立場によって異なっている。

そこで、本論文では、高野山の論義書である『宗義決択集』「心法色形」の内容を中心に検討し、中世の学匠はどのように識大を解釈していたのか考察する。

## 二 空海と六大——『即身成仏義』における識大の定義——

まず、空海による六大および識大の定義について、次の『即身成仏義』二頌八句の偈を確認する。

六大無礙常瑜伽 <small>体</small>	四種曼荼各不 <small>離相</small>
三密加持速疾顯 <small>用</small>	重重帝網名 <small>即身</small> <small>一礙無</small>
法然具 <small>足薩般若</small> <small>一</small>	心数心王過 <small>利塵</small> <small>一</small>
各具五智無際智	円鏡力故実覚智 <small>一</small> <small>明成仏</small> <small>一字</small>

偈の句はそれぞれ即身成仏の理論・実践を表現したものであり、偈の下に見える割註は要素などの体性を表す体、外観のすがたを表す相、作用を表す用という三大を示している。『即身成仏義』では、この体相用の三大のうち、六大の語を含

む第一句を体大に配していることから、五大のみならず、識大にも要素としての体性として認めていたことが看取される。

また、『即身成仏義』では、阿字門から如来が発生することをお説く『大日経』の如来発生偈を引用して、「謂諸法者心法、法相者色法。」と心法と諸法が不二であることを述べ、偈の「能生随類形 諸法与法相」<sup>(3)</sup>の諸法と法相の語をそれぞれ心法と色法に当てはめることで、六大の義を説いているとし、六大が如来を発生するという意味であると解釈した。

つまり、『即身成仏義』では、六大は体大であると定義され、識大と五大とは別のものではなく、一如一体であり、色心が無礙であることが述べられる。このことから後世の学匠は、空海は心に色形を認めていると理解し、またその思想を真言宗不共のものとして重視していくようになったのである。

### 三 『宗義決択集』における識大の解釈

中世の真言教学においては、伝統的に『金剛頂経』系の經典に説かれる五相成身観、『菩提心論』「我見<sup>(4)</sup>自心<sup>(5)</sup>形如<sup>(6)</sup>二月輪<sup>(7)</sup>」といった文、また、『秘蔵記』の「抛<sup>(8)</sup>三解脱門<sup>(9)</sup>自観<sup>(10)</sup>我心<sup>(11)</sup>、雖<sup>(12)</sup>無色無形<sup>(13)</sup>、而本来清浄潔白猶如<sup>(14)</sup>満月<sup>(15)</sup>。」や覚鑊の『心月輪秘釈』の説により、識大の形を満月の形と判じることが通例となっている。ただし、『秘蔵記』の文は前半部分のみを強調すると、心には色形が無いと理解でき、後半部分を強

調すると色形があると解釈できるため、色形の有無については、いずれにも理解することができるとなっている。

高野山教学の代表的な論義書である『宗義決択集』には、色形の有無に関して「心法色形」という論題が見える。「心法色形」は論題の下に宥快の名があることから、宥快の見解に基づくものであると見做すことができる。この「心法色形」の論義は、第一に、心に色形を認めないという真言宗所依の経論の説をどのように理解すべきか、第二には、識大に色形を認めるならばどのような形であるのかという二点が議論の中心となっている。

まず、第一の真言宗所依の経論の説に色形を認めない教説があるという問題については、色形の有無を説く経論の説を三重に分類して次のように説明する。

大凡於<sup>(1)</sup>明<sup>(2)</sup>心法<sup>(3)</sup>、應<sup>(4)</sup>有<sup>(5)</sup>三重<sup>(6)</sup>不同<sup>(7)</sup>。謂<sup>(8)</sup>、①先為<sup>(9)</sup>初心<sup>(10)</sup>凡夫<sup>(11)</sup>、則以<sup>(12)</sup>世間分限<sup>(13)</sup>月輪<sup>(14)</sup>、譬<sup>(15)</sup>示<sup>(16)</sup>心法<sup>(17)</sup>。心地觀經等<sup>(18)</sup>所説<sup>(19)</sup>相即<sup>(20)</sup>此<sup>(21)</sup>意也。次<sup>(22)</sup>心法<sup>(23)</sup>、当<sup>(24)</sup>体無漏法性<sup>(25)</sup>ノ月輪<sup>(26)</sup>、雖<sup>(27)</sup>是<sup>(28)</sup>本<sup>(29)</sup>具<sup>(30)</sup>色形<sup>(31)</sup>、円明常住<sup>(32)</sup>。②或<sup>(33)</sup>ハ約<sup>(34)</sup>遮情<sup>(35)</sup>、積<sup>(36)</sup>無<sup>(37)</sup>色形<sup>(38)</sup>、或<sup>(39)</sup>ハ以<sup>(40)</sup>心法<sup>(41)</sup>ハ広大無際<sup>(42)</sup>、世間ノ月輪<sup>(43)</sup>ハ分限起滅<sup>(44)</sup>、故<sup>(45)</sup>、積<sup>(46)</sup>非<sup>(47)</sup>実<sup>(48)</sup>月輪<sup>(49)</sup>、又<sup>(50)</sup>積<sup>(51)</sup>無<sup>(52)</sup>方<sup>(53)</sup>円<sup>(54)</sup>相<sup>(55)</sup>。是即<sup>(56)</sup>遮<sup>(57)</sup>実<sup>(58)</sup>有<sup>(59)</sup>ノ執<sup>(60)</sup>、揀<sup>(61)</sup>二分限<sup>(62)</sup>ノ色<sup>(63)</sup>。処々<sup>(64)</sup>積<sup>(65)</sup>文<sup>(66)</sup>多<sup>(67)</sup>ク此<sup>(68)</sup>ノ義<sup>(69)</sup>ナリ也。③而<sup>(70)</sup>実<sup>(71)</sup>心法<sup>(72)</sup>本<sup>(73)</sup>有<sup>(74)</sup>二色形<sup>(75)</sup>、故<sup>(76)</sup>。経論<sup>(77)</sup>ノ中<sup>(78)</sup>、或<sup>(79)</sup>ハ説<sup>(80)</sup>我見<sup>(81)</sup>自心<sup>(82)</sup>形如<sup>(83)</sup>月輪<sup>(84)</sup>。或<sup>(85)</sup>ハ説<sup>(86)</sup>三十七尊<sup>(87)</sup>心為<sup>(88)</sup>月輪<sup>(89)</sup>形<sup>(90)</sup>乃至<sup>(91)</sup>法性<sup>(92)</sup>月輪<sup>(93)</sup>。又<sup>(94)</sup>高祖<sup>(95)</sup>ハ積<sup>(96)</sup>無漏法性<sup>(97)</sup>月輪<sup>(98)</sup>、文<sup>(99)</sup>又<sup>(100)</sup>云、体<sup>(101)</sup>ハ潔白<sup>(102)</sup>之<sup>(103)</sup>体<sup>(104)</sup>ナリ、形<sup>(105)</sup>相<sup>(106)</sup>如<sup>(107)</sup>満月<sup>(108)</sup>、其<sup>(109)</sup>証<sup>(110)</sup>分明<sup>(111)</sup>ナリ。然<sup>(112)</sup>レハ、則<sup>(113)</sup>以<sup>(114)</sup>此<sup>(115)</sup>ノ三重<sup>(116)</sup>見<sup>(117)</sup>、諸<sup>(118)</sup>経論<sup>(119)</sup>及<sup>(120)</sup>祖師<sup>(121)</sup>ノ積<sup>(122)</sup>則<sup>(123)</sup>義理<sup>(124)</sup>莫<sup>(125)</sup>不<sup>(126)</sup>周<sup>(127)</sup>備<sup>(128)</sup>。既<sup>(129)</sup>云<sup>(130)</sup>

形如二月輪、又釈形如三月輪、豈非譬心色形於月輪哉。

すなわち、第一重には、初心の凡夫のために喩えとして心は月輪の形のようにであると説く説(①)、第二重には、遮情のために心には色形が無いと釈す説(②)、第三重として、真言宗の秘密の深旨として、経論に五相成身観などの心を月輪として見るといふ説(③)を挙げる。この三重の段階によって心法の色形は説かれるため、一見、経論の内容に整合性がないようであっても問題がないとする。

この三重の説は、それぞれが次に挙げる経論の教説に基づいて立てられている。まず、第一重は『心地観経』の「凡夫所観菩提心相、猶如清浄円満月輪」といふ文であり、文中に凡夫の語が見えることによる。第二重は『大日経』の「心不在内不在外、及両中間心不可得。秘密主如来応正等覚。非青非黄非赤非白非紅紫非水精色、非長非短非円非方、非明非暗、非男非女非不男女」、『大日経疏』の「然此心在纏・出纏皆畢竟無相。以如来五眼諦観、尚不能得其像貌。況余生滅中人」、また、『秘蔵記』の「無色無形」といふ心に色形を認めないという記述を指す。そして、第三重は、『宗義決択集』に『略出念誦経』卷二の「形状如月輪澄静清浄無諸垢穢」や『守護国界主陀羅尼経』卷二の「以堅牢智諦観自心以為二月輪。当下於鼻端不令馳散。清浄円

満色如凝雪牛乳水精。而此月輪為菩提心。此菩提心本無色相。為未成就諸衆生故説如二月輪」といふ文が心が月輪の形を取る証文として挙げられていることから、これらの経典を典拠としていふと考えられる。

また、第二の識大の形の問題については、宥快は先に挙げた『金剛頂経』や『菩提心論』の月輪を心の姿として観想するという文を用い、色形があるというためには視覚でその色形が捉えられるかどうかが重要であるという観点から、次のように心法の色形を論じている。

次ニ色心二法ノ分別、於前五大ニ則帶シ色形ヲ。第六識大ハ是レ慮智性ナリト云ハ者、一往ハ爾ナリ。雖レ然ト擲レサハ、実ニ則雖ニ心法ト具ニ色形ヲ以ニ其微細ナルヲ。故。常途ノ諸教ニハ、不レ明レ之ヲ。例セハ、如シ前五大中ニ空大ハ以ニ微細ナルヲ。故ニ、常途ニ不レカ談ニ其色形也。又風大ニモ亦無ニ云色形ニ婆沙ノ一義也。又如ニ無色界ノ得名ノ。大師ノ釈ニ云、麁色雖レ無シト細色非レ無キニ文。是レ即雖レ具ニ細色ト擲レテ無ニ麁色ニ得ニ無色ノ名。況ヤ如キハ、心法ノ甚深微細ニシテ、雖レ帶ニ色形ト非ニ麁顯ノ相ニ。常途ニ不レコト談良ニ有レカナヘ哉。

『宗義決択集』では、凡夫には見えない微細な色形が心法にあることを強調し、その具体的な形として現れたものは月輪形であるとする。そして、心法の色形は微細なので、密教以外の常途の教えでは明かされないのである。このような説は、杲宝(一三〇三、一三六二)の著作である『杲宝私鈔』

## 中世真言教学における識大の解釈（林 山）

に次のように見える。

総意云、心法ノ形相ハ即ニシテ無形ニ成ニ其ノ形相ヲ、故微細幽遠ニシテ如々平等也。此故凡夫ハ雖レ不見レ之ヲ。以ニ仏眼ヲ知ニ見シテ之ヲ説テ為ニ金界ノ曼荼羅ト也。例セハ如下無色界ノ衆生形色微細ナルカ故。以ニ凡見一雖レ不見レ之。仏眼照レシテ之ヲ図中スル四空処ノ形ヲ也。留意ヲ可レ思レ之。

この杲宝の説は心法の形色が微細であることを説いたものであり、宥快の解釈に先行するものである。ただし、宥快の説は杲宝の説に比べ、さらに微細な色形を強調したものとなっている。

宥快は、六大すべてが微細な色の所成であるということの例証として次の二例を挙げる。第一に、六大の色形を論じた場合、空大は微細な色からできているので、常途では色形を談じないこと、また、『婆沙論』の一義では、風大にも色形がないとする例、第二には、四蘊所成のため色が無いとされる無色界にも名前がついているのは、麁色ではなく心法四蘊の細色があるためであるという例である。

特に、第二の無色界の細色の例に対して、難者は「無色界細色ノ義雖ニ是レ例証ト非ルカ心法ノ色ニ故ニ非ニ誠証ニ也」として、無色界の例は心法の色を談じている例ではないことを指摘し、また、小乗にも顕教にも無色界の色は説かれるものであるため、無色界の例を用いることによって真言宗不共の説と

は言えなくなると反駁している。この意見に対し、答者は次のような見解を示している。

次無色界ノ例証、非レ謂ニハ無色界ノ細色、即チ心法ノ色ナリト。雖レ有レト色以ニ微細一ナルヲ言レト無ト之例ニ出レ之ヲ。言ク雖レ曰ニト無色ト実ニハ則チ有レト色、則チ心法ノ色モ以ニ微細一ナルヲ故ニ言フ無レト色也。是レ即例証ナリト。或ハ又彼ノ無色界ハ四蘊所成ノ故ニ無レシ有レト色。而モ実ニハ則チ許レト有レト細色一則チ是レ心法四蘊ノ色一ナル故ニ以テ為ニ心法色形ノ証拠ト義モ亦有レト之乎。

答者は、あくまで無色界は例証であるとした上で、他の大乗では色形を説かないが、自宗では、五蘊のうち、受・想・行・識という心のはたらきを細色とし、心法の色であると述べる。また、経論で説かれる月輪を譬喩とするか法説とするかという問題についても、色形がなければ、月輪と名付けることがないことから、心に形があることは明らかであると主張するのである。

このように、『宗義決択集』では、色形が認識可能か否かという点に主眼をおいて識大の色形を論じている。そのため、『俱舍』・『婆沙論』の思想を解釈に依用して、識大には微細な色があると説明した。そのことによって、真言不共を強調するより、むしろ顕教的な一面を持つことになってしまった面は否めない。

なお、初期仏教の用語によって六大を解釈した宥快の著作

として、『知自心鈔』を挙げる事ができる。『知自心鈔』は、自法界から他法界へ移る時に六大をすべて受生するののかという事についてを問題としている。すなわち、他法界へ移る際に、識大のみを受生するののかどうかという問いに対して、宥快は六大をすべて受けると答へ、さらに本分の識大の中に六大の要素が含まれていると主張する。

本文識大者我等息是也。此息不可得五色糸名也。仏平等色心未分。所謂此息本体常住不滅堅固故地大也。息有<sub>二</sub>湿潤<sub>一</sub>是水大也。息有<sub>二</sub>煖氣<sub>一</sub>是火大也。息有<sub>二</sub>風氣<sub>一</sub>是風大也。息有<sub>二</sub>虚通無礙<sub>一</sub>是空大也。息有<sub>二</sub>無分別智<sub>一</sub>是識大也。此識大者全指<sub>二</sub>息体<sub>一</sub>也。是名<sub>二</sub>自性六大<sub>一</sub>。

『知自心鈔』には、常住不滅の堅固さとして地大、湿潤の性質として水大、暖かさ（煖氣）として火大、風氣として風大、虚空無礙として空大、無分別の智として識大という息の六大が説かれる。これらの六大の要素は初期仏教に説かれる六大種の実体「堅・湿・煖・動・無礙・了別」を踏まえたものであることはいうまでもない。また、さらに宥快は息という字は解字すると自と心より成ることから、『大日経』の「如実知自心」の「自心を知る」に通じ、また識大であるとする。

宥快の言う本分の識大とは、息のことであり、息は六大の要素をすべて含み持つとする。このような考えは、三寶院流の僧である憲深（一一九二～一二六三）の『宗骨抄』に命息思

想として見る事ができるものであり、宥快の『知自心鈔』は『宗骨抄』を踏まえ論じたものである<sup>(18)</sup>。

『知自心鈔』では、見聞・覚知・語黙・動静といったはたらきは、心の作用が物質として姿をとって現れたものではなく、心の動きによって生じた、目に見える働きであるとし、それが識大であるとする。先に見たように、宥快の六大の解釈においては、対象を認識できるかどうかが重要であったと言える。

#### 四 おわりに

以上、識大に色形を認めるか否かについて、『宗義決択集』を中心に検討した。この問題は「心法色形」という論題で新義・古義を問わず取りあげられ、多くは心法に色形はありと結論づけている。心法に色形を認めることは、色形を認めない顕教に対して、即身成仏・六大などにかかわる自宗の不共の教説となるためであり、真言宗の学僧達は色形があると証明することに心血を注いだのである。

一方、議論が深まるにつれ、色形の有無の判断は「見る」すなわち視覚で捉えられるかどうかを重視するようになる。これは、『金剛頂経』や『菩提心論』の心を満月と見るという記述に起因するのであるが、『宗義決択集』ではさらに心法には凡夫には見えない微細な色形があると強調するようになり、『婆沙論』の説などを例証として取り入れるようになった。た

## 中世真言教学における識大の解釈(林 山)

だし、『毘曇(俱舍)』・『婆沙論』の思想を取り入れて心法が微細な色形を持つと詳細に説明したことによって、かえって密教不共の六大思想という面が強調できなくなってしまった点を指摘できる。

識大の問題については、『宗義決択集』に見える宥快の説しかりあげることができなかった。六大の色形に関する問題は中世の学匠によって数多く論じられている。今回は他の真言宗の学僧の説との比較ができなかったため、今後の課題としたい。

- 1 大正七七・三八一頁下。
- 2 大正一八・三一頁上。
- 3 大正七七・三八二頁上中。
- 4 大正三二・五七三頁下。
- 5 定本弘全五・一三一頁。
- 6 大正七九・三九頁上中。
- 7 真全一九・八〇頁上。
- 8 大正三・三二八頁下〜三二九頁上。
- 9 大正一八・一頁下。
- 10 大正三九・六〇六頁上。
- 11 大正一八・二三七頁中。
- 12 大正一九・五三〇頁上。
- 13 真全一九・七八頁上。
- 14 真全二〇・一六頁下。

- 15 真全一九・八三頁上。
- 16 真全一九・八一頁上。
- 17 続真全二三・七五頁下。
- 18 亀山隆彦「中世真言密教における命息思想の展開——『宗骨抄』を中心に——」(『印度学仏教学研究』第五九卷第二号、二〇一一)を  
中心に——(『印度学仏教学研究』第五九卷第二号、二〇一一)。

## 〈参考文献〉

- 亀山隆彦「中世真言密教における命息思想の展開——『宗骨抄』を中心に——」(『印度学仏教学研究』第五九卷第二号、二〇一一、一一九—一二二頁)

## 〈キーワード〉 識大、『宗義決択集』、心法色形、宥快

(早稲田大学本庄高等学院非常勤講師)